



モラハラ相談ハンドブック (3) ハラッサーになる6パターン

中尾英司 (家族相談士・シニア産業カウンセラー)



- モラハラとは、どういう状況を言うのか。それはどのように始まって、将来はどのようになっていくのか。
- なぜハラッサーのような人間が生まれ、そしてハラッサーはどのように人を支配するのか。
- ハラッサー(被害者)に特徴はあるのか、なぜ逃げられないのか。子どもへの影響はどうか。
- 事前に見分ける方法はあるのか、また気づいたときにはどうすればよいのか。そして、わかりにくいこの状況を親や弁護士にどう伝えればよいのか。

それらのことについて、下記の通りまとめてあります。モラハラ相談をされる際の手引きとして、ご参考になれば幸いです。

- 1. モラハラメントとは、「人権無視の犯罪」
- 2. モラハラが始まり方は、「ある日突然」
- 3. 支配のポイントは「理不尽」
- 4. 理不尽は「激化」する
- 5. 逃げられない＝「無力化」のメカニズム
- 6. ハラッサーとは、「甲殻類」
- 7. ハラッサーの特徴は、「変面」
- 8. ハラッサーになる6パターン
- 9. モラハラ親への理解のさせ方
- 10. モラハラ被害者に特徴はあるのか
- 11. 事前に見分ける方法
- 12. 気づいたときにどうすればいいか
- Lastメッセージ

今回は、ハラッサー(モラハラをする人)がハラメントをするようになるきっかけについて書いてみます。先に書きましたように、自分と親との関係が根にありますので、いつどのようにハラメントが発現(発症)するかという観点です。

■8. ハラッサーになる6パターン

- (1) 内在化された夫婦のコミュニケーションパターンが、結婚と同時に発動する場合
- (2) 会社生活などで支配と服従のコミュニケーションパターンに接して発現、あるいは新たに学ぶ場合
- (3) 自分自身が何らかの目標の手足となっている場合
- (4) 親の支配から離脱できていない場合
- (5) 母子未分離(母子カプセル)の場合
- (6) 抑圧されてきた感情を抑えきれず、家族に当たり散らしている状態

(1)は、恋人時代には分かりません。5年間付き合っていた間はハラメントがなく、婚姻届を出した翌日からモラハラの日々が始まったという例があります。内在化とは、夫婦関係が支配と服従の関係であるということをも身体で学んでいるということです。学ぶとは「真似ぶ」、つまり真似ること。心理学用語では「モデリング」といいます。

夫婦のコミュニケーションモデルを学べるのは、自分の両親。恋人時代は対等ですから、個人対個人の会話が成立しているのですが、結婚して夫婦というステータス(状態)に移行すると、会話のパターンが変わります。それは、かつて自分が見てきた両親の「コミュニケーションパターン」なのです。

ですから、親がハラッサーであったり、男尊女卑であったりする場合は要注意。人は自分がされたことを人にしてしまいます。逆に自分が学んでいないことはできないのです。しかし、人は「学び直す」ことができます！



(2) 戦後の会社は、農家の跡を継がない長子以外の人間が支え合うムラ社会的共同体でした。高度成長期には競争力をつけるために人を育てようとしてきました。ところが、グローバル競争となり人をコスト(外人労働力が安い)と見なすようになった今の会社は、人を手足として露骨に扱うようになりました。

つまり、大学までどんなにいい教育を受けても、会社がスポイル(汚)してしまうのです。会社が、「言うことを聞け」「考えるな」「従え」という洗脳を行いますから…洗脳された夫は、同じ事を家庭でも言うようになるわけです。会社で手足扱ひされている人間は、顧客を、そして家族を手足として扱うようになります。ですから、顧客を金づると見、さらには詐欺商法や詐欺そのものまでが全盛を誇るようになるのです。そして、カネが唯一の評価基準の中で生きようになる夫は、だんだんこう言うようになります。

「誰が稼いでいると思っているんだ」

カネを得ることが最大の価値であるように錯覚してしまうのです。そのため、稼いでいない人間を本気で「無能」と思うようになります。このように夫が言い始めたら、「夫は会社に洗脳された」と思ってください。そして、洗脳を解くことは素人ではできません。(脱カルトがどんなに大変かを見れば分かると思います。ちなみに2007年問題と言われる団塊世代の問題も、その本質は会社人間であった男性の社会人間化。つまり、会社というサティアンからの脱カルトなのです。再教育プログラムが必要とされるゆえんです)

(3) 何らかの目標→いろいろあります。家訓の奴隷となった堤義明、お家再興に邁進した武藤家の母親(短大生遺体切断事件)など、自分が目標達成の手足となっている人間は、自分に関わる人間を手足にすることに何の痛みも感じません。カウンセリングの現場でも、このように支配する父親、支配する母親の問題は極めて大きな問題です。

やっかいなことは、当人が無意識であること(そこに気づいてもらうのが、私の役割です)。無意識であるが故に暴走を止められず、犠牲者を出すこととなります。

尚、名家、旧家、医者や教師の一族、家業を持っている、など社会的にはうらやましがられる「家」が落とし穴に陥りやすいです。なぜなら、「家」の存続が第一で、人は手足になってしまうからです。

(4) 上記のような親の手足となった人間は、2つのパターンをとります。1つは、妻子を自分の実家の価値感に染ませようとしています。会社における洗脳と同じです。もう1つは、妻子を自分と親との間の防壁にしようとしています。一つめのパターンがハラッサーとなりますが、いずれのパターンも人を道具と考えていることに変わりはありません。

(5) 左記の(1)と似ていますが、異なります。母親の支配を受けていることは同じです。が、左記(1)は、親の手足となって動いているのに対して、母子未分離(母子カプセル)の場合は自分がオールマイティの感覚で動いています。母子未分離とは、「乳飲み子の赤ちゃん」の状態です。乳飲み子は、いつも暖かく包まれて快適で、お腹がすけばおっぱいに吸い付けばいいし、身の回りのことは全てお母さんがしてくれま。つまり、衣食住のすべて、というよりも自分の世界の全てがお母さんという環境の中にあり、何でもそこで満たされるので、全てが自分の思いのままになるオールマイティの感覚を持ちます。

そして、このように母親と一体化しているの、自他の区別ができません。自分が絶対的な存在なのです。自他の区別ができないということは、他人に思いや感情があるということがわからないということ。そして、

赤ちゃんが自分を相対化できるのは、乳離れをするときです。ある日、私は妻のおっぱいに人の顔を書き、いつものように無意識にむしゃぶりつこうとした娘は、顔に気づいた途端にギョッとして妙な顔になり、それからおっぱいを吸うのをやめました。そして、この日から夜泣きが始まりました。母子分離がなされ、孤独を知り、不安を知ったのです。

これを「口唇期の試練」と言いますが、母親が溺愛するあまり、この試練を経ないままに大人になっている男性も見受けられます。そういう男性はオールマイティ感を持ち、自分の気持ちと他人の気持ちの区別がつかないことがあります。また、自分の思い通りにならないことに対してイライラするでしょう。それが、相手を思いのままに動かそうとすることにつながります。

(6) これにも2つあります。一つは、親からの支配や押しつけの中で、自分の気持ちを受け止めてもらえない場合。もう一つは、母子カプセルの中で自分が成長できない息苦しさを、無意識のうちに感じている場合です。いずれも、自分という人間を認める！という怒りが渦巻いています。

自分を壊さないために怒りを吐き出さなければなりませんので、怒るきっかけをほしがります。はき出したい怒りが先にあって、怒る理由は何でもよいので、どんな理不尽なことでもキレるのです。

このパターンは、支配のためのハラメントとは異なりますが、家族は地雷を踏まないように(と言っても無理なのですが)怯えて暮らすようになります。

(中尾英司)

※項目9以降は、次号掲載の予定です。中尾先生のブログでも公開されていますので、すべてご覧になりたい方は「あなたの子供を加害者にしないために」(Google入り)でご訪問ください。(バビリオン編集部)

<著者紹介>

中尾英司 (家族相談士・シニア産業カウンセラー)

■メール: sodan@jiritusien.com

■サイト:「中尾相談室」、「組織改革支援.COM」

■ブログ:「あなたの子供を加害者にしないために」